

1.3 ヨーロッパ言語共通参照枠組み (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment) の最近の動向

1.3.1 CEF 誕生まで

1.3.1.1 *The Threshold Level*

1960年代、ECとしてヨーロッパ内の相互依存が高まる中、欧州評議会は言語教育の方向性を探るため活発に動き始めた。そして、1970年代にはその言語政策に基づいた数々のプロジェクトを推進した(1.1参照)が、その一つが、教師やコース担当者が学習者のニーズを分析し、学習目標を設定するのを手助けする道具の開発であった。その成果が1975年に発行された英語を例とする *The Threshold Level* (van Ek, 1975) で、当時ヨーロッパをはじめ世界各地の外国語教育に大きなインパクトを与えた。

The Threshold Level の中で用いられている Threshold レベルとは、言語学習者が適切なコミュニケーションを取れると言えるためには、少なくとも何ができれば良いか、という敷居 (threshold) に当たるレベルを示したものだと言える。それまでの、構造主義に基づく言語教育とは異なり、日常生活において一人でコミュニケーション行動ができることを目標に掲げ、そのために必要なトピック、機能、概念、語彙、文法項目を記した。さらに、社会文化能力、自律学習、発音、表記、待遇表現からも言語を見ている。その考え方の土台となったのは、英国の言語学者 D.A. Wilkins が1972年欧州評議会から出した報告書、“The linguistic and situational content of the common core in a unit/credit system” である。この中で、言語をコミュニケーションの道具として位置づけ、言語の概念 (notion) と機能 (function) を紹介している。その後 Wilkins は、1976年 *Notional Syllabuses* を出版するにいたる。 *The Threshold Level* は、直後に発行されたフランス語版などに広範に翻訳、応用されている。Threshold レベルの下レベルにあたる *Waystage Level* (van Ek, 1977) は、2年後に続いて出され、言語学習の縦のレベル分けの指針となった。両書は1991年に改訂版が出され、さらに Threshold レベルの上になる *Vantage* (van Ek & Trim, 2001) もその後、出版されている。

The Threshold Level の包括的な目的は「言語教育の幅と効果を増大することによって、ヨーロッパ内での人や考えの行き来をより容易にする (筆者訳)」(Van Ek, 1975) ことである。この考え方は、後に欧州評議会が制定する共通枠組みに踏襲されている。*The Threshold Level* の内容は、具体的である。例えば、機能としては「賛同、反対する」、「感情を表す」などに使われる言い方が出ている。また、「存在」、「時間」、「空間」、などの概念を表すのに必要な表現がリストされている。一方、文法項目として、単語レベルには冠詞の選択、名詞の複数形、代名詞、動詞、助動詞の活用などがあげられ、合わせて、句、節レベルでの文法項目も提示されており、必要な語彙は、A から Z までアルファベット順にリストアップされている。さらに、社会文化能力としては、挨拶、生活場面、人間関係などが述べられている。発音に関しては上昇、下降イントネーションがいつ使われるかなど、具体的な内容が詳細に述べられている。

1.3.1.2 *The Threshold Level* 後

1990年代半ば、ヨーロッパ統合の動きに合わせて、欧州評議会は、さまざまな既存の言

語能力基準、および言語学習・教育に関連するガイドラインを、一貫した枠組み (framework) として打ち出すことを考え始める。1991年、ルシュリコンでのシンポジウムにおいて、ヨーロッパ共通の言語能力を規定する枠組み設定の案が、個人の言語学習を記録するポートフォリオ作成の提案とともに出された。その後プロジェクト・グループで従来の言語能力基準やレベル設定を分析し、それらの理論的裏付けと客観的な方法論を検討し、一つの言語および一つの教育レベルを超えた、汎用性のあるものを目指すという方針が打ち出された。ルシュリコンのシンポジウム後、スイス政府がポートフォリオ開発に資金投資をすることとなり、またスイスの科学研究費の支給もあり、スイスが開発の中心的役割を担うことになる。そのリーダーとなったのが、B. North で、North が提唱した言語達成度の記述方法論に基づいて開発が始まった。1993年に欧州評議会は、関心を示した加入国からの代表、スイスグループ (実際はフランス人の D. Coste、ドイツ人の G. Schneider、英国人の B. North とスイス人の R. Richterich)、UCLES¹ の M. Milanovic、プロジェクトリーダーの J. Trim そして欧州評議会事務局の J. Sheils からなる委員会を発足した。1993年から1996年に行われたスイス研究プロジェクトでは、レベル判定に用いる能力記述尺度 (descriptors) と言語学習を記録する European Language Portfolio (ELP) の原型が開発された。それは、2,000ほどの「～ができる (can do)」を用いた例示的能力記述文 (illustrative descriptors) を使い、2,800人の学習者のデータを収集し、検証を重ねた大掛かりなプロジェクトであった。その能力記述文を基にした枠組みの執筆は J. Trim、B. North、D. Coste と J. Sheils があたり、Common European Framework of Reference for Languages: learning, teaching and assessment (ヨーロッパ言語共通参照枠組み²) と名づけられ、略して CEF と呼ばれるようになる。1996年に初版が、そして1998年に改訂版が発行された。その後大規模なフィードバックや議論を経て、現在の形の CEF が英語版とフランス語版で、2001年に出版された。CEF の誕生の背景には、ヨーロッパの文化遺産とも言える多文化、多言語の環境がある。ヨーロッパのニーズに合わせるためには、すべてのヨーロッパ人が、言語および文化の境界を越え、お互いにコミュニケーションが図れる能力を開発しなければならない。そのための生涯学習の努力を奨励する必要から、CEF は制定されたと言える。CEF は、開発に10年を費やし、その前段階である *The Threshold Level* から見れば30年の歳月をかけた言語教育の理念である。2004年12月現在、英語、フランス語以外に17の言語に翻訳され入手可能であり、今でもなお翻訳活動が続けられている。日本語訳も2004年に出版された (吉島、大橋 (訳・編) 2004)。以下では、CEF を簡単に説明し、2003年に公開された CEF を既存の試験とどう関連づけていけばいいかという点に関してのマニュアルを中心に、CEF の最近の動向を概観していく。

1.3.2 CEF について

1.3.2.1 目的

欧州評議会によって制定された CEF とはヨーロッパにおいて、外国語教育のシラバス、カリキュラム、教科書、試験の作成時および学習者の能力評価時に共通の基準となるもので

¹ University of Cambridge Local Examinations Syndicate 英国の試験作成機関

² 日本語版のタイトルは、『外国語教育 II-外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』となっているが、本稿では、「ヨーロッパ言語共通参照枠組み」と訳す。

ある。また、外国語によるコミュニケーションを行うために、学習者はいかなる知識と言語運用能力を備えていなければならないかを、広範囲にわたって詳細に規定したものである。学習者個人の生涯にわたる言語学習を、ヨーロッパのどこに住んでいても継続的に測定することができるよう、言語運用能力を段階別に明記している。また CEF にはヨーロッパ各国において異なる教育システムのもとで、教育行政関係者、コースデザイナー、教師など教育分野に携わる者が、国境を越えて外国語教育に取り組むことを奨励する意味も含まれている。CEF の目的は次のように要約できる。

- ・目標、内容、方法を明確に記述し、共通の基盤を規定することによって、コース、シラバス、資格の透明性、外国語教育の分野における国際協力を推進する。
- ・言語達成度を表す客観的な基準を設けることによって、異なった学習環境で得た資格を相互認定することを容易にし、結果としてヨーロッパ内の人の移動を促進する。

1.3.2.2 基本姿勢

CEF の基盤となっている複言語主義 (plurilingualism) の言語観は、CEF が誕生するに至ったヨーロッパの事情を強く反映している。従来の多言語主義 (multilingualism) は複数の外国語を母語話者並みに運用できることを目指しており、教育制度の中で外国語の選択肢を増やすことによって達成できるとされてきた。しかし、CEF の推進するヨーロッパが取るべきアプローチとは、このような多言語主義ではなく複言語主義である。特定の社会の中で複数の言語が存在することを重視するという従来のものではなく、個人の言語体験の中で複数の言語知識やそれぞれの言語に付随する文化が、相互の関係を築き、作用しあう点を重視する。つまり、コミュニケーション能力の成立にはすべての言語知識と経験、異文化に対する理解が寄与している、とする考え方である。この背景には、例えば人々が容易に他国と行き来ができ、車に数時間乗れば使用言語が数回変わる、一日に数言語を使う人が多い、というヨーロッパ独自の環境がある。また、より適切な情報や人材を求めて、言語の壁を越える人も多い。教育現場においても「エラスムス計画」などの留学制度によって、より自分にあった教育環境、あるいは情報を求めて、学生がヨーロッパ内に行き来する機会が増えてきている。

このような状況から言語学習・教育の目標は根本的に変わる時期にきていると CEF は捉えている。母語話者を到達目標として多数の言語に熟達することは、もはや目標ではない。学習者、教育者の目標は、異なった場面で、特定の相手に対して、さまざまな能力を使い分けて効果的なコミュニケーションを行うことである。例えば、家族内での会話中、一つの言語から他の言語へ瞬時に使用言語を変換できること、知らない言語でも言語知識、経験を駆使して推測できること、である。言語使用において完璧であることには特に注目をしない。その結果、日常生活に密着した多文化、多言語の中で、相互の言語及び文化を理解し、他の言語および文化に対して寛容であることが可能になる。このように第1に人の行き来の多さ、第2に言語の枠を越えてより適切な情報を求める動き、第3に言語、文化の相互理解と許容の必要性、という3点に集約されたヨーロッパの現状が CEF の言語観を形成している。

CEF ではヨーロッパの現状に基づいた言語観、言語学習・教育観を行動志向的 (action-oriented) アプローチとする。このアプローチは言語使用者あるいは学習者を「社会的に行為する者」と捉える。また発話行為を、ある状況下で課題を遂行するための活動の一つである、とする。

1.3.2.3 内容

CEFには、外国語学習に関する広範囲の事項が詳細に規定されている。中でも一番重要視されているのが、外国語学習者、教育者にとって有用な学習段階の厳密なレベル設定である。このCEFのレベル設定は、縦軸と横軸の二方向からなされている。前者は能力レベル段階の記述であり、後者は各レベル内の言語使用の広がりに関する記述である。文法項目、語彙数はレベル設定の基準とされていない。

言語能力の段階別レベルはCEFのCommon Reference Level（以下CEF参照レベル）と呼ばれており、CEFRとも記されることがある。レベル設定にあたって、まずレベルを大きく3段階に分け、それらをさらに2段階に区別し、6レベルで提示している。図1の右側が、長年欧州評議会が広めてきた名称であるが、従来の名称は各国語に翻訳が難しいと不評だったので、言葉を用いるのではなく、A、B、Cでレベルを表すことになった。

図1 CEF参照レベル

C	熟達した言語使用者	—	C2	Mastery
		—	C1	Effective Operational Proficiency
B	自立した言語使用者	—	B2	Vantage
		—	B1	Threshold
A	基礎段階の言語使用者	—	A2	Waystage
		—	A1	Breakthrough

各レベルは、能力記述文によって記述されている。例示的能力記述文には「～ができる」という書き方が用いられ、能力を肯定的に評価するCEFの姿勢が反映されている。「～ができるならばレベルはこうなる」という学習者の「できること（Can do）」からレベルを明らかにする診断的方法を取ることを奨励している。「～ができていないと、このレベル到達とは見なさない」という従来の見方とは異なる。表1はCEF参照レベルの段階別の全体的なレベル記述（global scale）であり、CEFの柱となっているものである。

表 1 共通参照レベル：全体的な尺度

熟達した言語使用者	C2	聞いたり、読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。 いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができ、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。 言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる。複雑な話題について明確でしっかりとした構成の詳細なテキストを作ることができる。その際テキストを構成する字句や接続表現、結束表現の用法をマスターしていることがうかがえる。
自立した言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解することができる。 お互いに緊張しないで母語話者とやり取りができるくらい流暢かつ自然である。かなり広汎な範囲の話題について、明確で詳細なテキストを作ることができ、さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる。
	B1	仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。 その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。 身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈略のあるテキストを作ることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。
基礎段階の言語使用者	A2	ごく基本的な個人的情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。 簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。 自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。 自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりできる。 もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。

吉島・大橋（訳・編）2004：p. 25より © Goethe-Institut Tokyo

言語使用の横の広がりとは、*The Threshold Level* には、はっきりと取り入れられていなかったが学習者のコミュニケーション能力を図る際には大切な分野である。例えば、ホテルで暖房が効かなかった際にいろいろな対応の仕方が考えられる。「暖房が壊れました。直して下さい」とも、「すみませんが、ちょっと寒いのですが、暖房の調子を見ていただけませんか。それが無理なら、部屋を替えていただくことはできるでしょうか。」と言うこともできる。最初の言い方は言語能力レベルが低く、後者はレベルが高いと、従来は考えられがちだった。しかし、目標達成のためにあえて単刀直入な前者の言い方を選んだほうが効果的な場合もあるだろう。それは、言語能力だけではなく、むしろ言語運用の適切さの問題である。与えられた場面、状況下で、特定の相手に対して適切な言語使用ができるか、という社会言語能力と呼んでいる観点である。CEF では横の広がりとして認識し、言語活動の領域 (domain) を、公的 (public)、私的 (private)、職業的 (occupational)、教育的 (education)

の四つに分けた。そして、それぞれの領域内で言語活動の状況を列挙し、言語能力を記述した (1.3 表 2 参照)。さらに、ストラテジー、テーマ、タスクなどからも言語活動を捉えている。

CEF にはさらに、学習者や外国語話者が自らの言語能力を確認するために、自己診断がある。これは、ELP にも用いられ (1.4 参照)、言語技能別に分かれている CEF 参照レベルの自己評価表 (self-assessment grid) と呼ばれ、広く普及している (1.3 表 3 参照)。

CEF の記述は非常に多岐にわたり、詳細で厳密であるが、画一基準を押し付けるものではない。むしろ、実際に使用する者が CEF の言語理論を理解したうえで、記述や例をもとに、状況に合わせて適用していくことが期待されている。例えば、学習者の能力の記述、あるいは、評価時におけるレベル数の設定に関しては、使用者が状況や学習者のレベルに合わせ、融通を利かせて用いることを CEF は奨励している。このように、CEF は言語教育に携わっている者の指針となるものである。

1.3.3 CEF 導入の活用例

本稿の第 2 章で見ていくように、CEF は調査対象国 8 か国すべてに何らかの形で導入されている。国の言語政策に反映している場合、達成目標を CEF 共通参照レベルを用いて設定しているケースもある。具体的な例は第 2 章でいくつか取り上げるが、まずは、ヨーロッパ各国で CEF を活用している実例を以下に列挙する³。

- ・ポーランドでの CEF

1999 年の教育改革の際、初等・中等教育の外国語教育のシラバス・デザイン、教員養成のカリキュラム改定、学習者の自己評価、言語能力測定の面において、CEF が活用された。

- ・カタロニア (スペイン) での CEF

カタロニア語とスペイン語が公用語であるカタロニアで、カリキュラムデザインと評価の面で CEF が参考とされ、CEF 参照レベルが基準として採用され、言語の教育と評価の基準点を CEF に見出している。具体的には、国立の成人語学教育機関で、カリキュラムデザイン、各段階の言語能力規定をするのに役立てた。また、バルセロナ自治大学は、CEF をもとに評価基準を設ける試みをしている。

- ・英国の Open University での CEF

Open University は 30 年以上の歴史を誇る、英国の放送大学である。スペイン語のコースを発足させる際、CEF を活用し、習得目標や達成度を CEF 参照レベルと合わせ、設定した。CEF の寄与した大きな点は、コミュニケーション能力の育成に関する記述である。また、視聴覚教材を作成する段階で、CEF が詳細に記述したインターアクション、コミュニケーション活動が役立った。

- ・バーゼル大学 (スイス) での CEF

スイスでは、大学入学資格試験に合格したものは、全員大学入学資格が得られる。フランス語圏、イタリア語圏、ロマンス語圏からの入学者に対して、ドイツ語圏のバーゼル大学は試験ができない。よって、語学能力の判断が難しいことが受け入れ側では問題となって

³ Council of Europe (2002) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment Case Studies*

いた。大学入学時に CEF 共通参照レベルの全体表とアンケートを用いて自己診断をさせ、受け入れ態勢を整えることに役立てている。

また、現在、ヨーロッパ各国において、いかに CEF をより具体的に取り入れていくかという問題に焦点をあてたプロジェクトが進行している。例えば、第 2 言語・外国語としての自国語学習・教育に、ドイツでは *Profile Duetsch* が、フランスでは *Un référentiel pour le français* が既に出版されている。これらは、CEF 参照レベルを Threshold、Vantage レベルと結びつけ、言語学習における必要な学習項目を割り出し、表示している。各種技能、場面、領域などと能力記述文とを検索できるような CD-Rom も完成している (3.4 参照)。

さらに、オランダ教育・文化・科学省は 2003 年にヨーロッパにおける外国語教育の開発を図ることを目的として、いくつかのプロジェクトを始めることにしたが、その一つがオランダ CEF 構築プロジェクト (The Dutch Construct Project) である。プロジェクトの目的は、「読解」と「聴解」の語学試験開発に携わる関係者が、試験項目を CEF に関連づけるのに役立つような手段を開発することである。先に述べた「語学能力試験の CEF への関連付けに関するマニュアル」を補足するものだとされる。現在までに、プロジェクトチームは、試験項目の CEF との関連性を測るための一つの手段として、試験項目のチェック枠 (The Dutch CEF Grid) を開発した (Alderson, Figueras, Kuijper, Nold, Takala, & Tardieu 2004b)。

一方、EU でも CEF の有用性を認めている。EU は、ヨーロッパ市民の言語学習を広める目的、特に母語と二つの言語習得の促進をしている中で、各国の言語政策の効果を計ることを考えている。そのために、そのヨーロッパ言語能力指標 (European linguistic competence indicator) の開発が始められ (1.1 参照)、ヨーロッパ一斉の言語テストをし、国別比較することを決めた。その尺度として EU 加盟国内で広く普及しており、信頼性が高いということ CEF が使われることになっている。

1.3.4 語学能力試験を CEF に関連付けるマニュアル (Manual for Relating Language Examinations to CEF)

前節で見たように、英語、フランス語版が出版されてから 3 年たった現在、CEF を作成し、ヨーロッパ内にその考え方を広めて行こうとする初期の目的は、ある程度達成されたと言える。ただし、CEF に関して問題点が指摘されていないわけではない。まず、欧州評議会が発行した CEF そのもの、また CEF に関する資料集は長く、抽象的で、わかりにくい。いろいろな項目に分けた表が多々あり、それも項目ごとに網羅されているわけではなく、恣意的に例示されているので理解するには時間がかかる。日々の授業に追われている教師は、実際に即時現場に役に立つことを求めているので、CEF にあえて取り組もうとする意欲が湧かない。この点を補うためには、より読者にわかりやすく改善した出版物を出すことと共に、CEF をじっくり読み込み、理解した研究者が教員養成や教員研修の場で、CEF を広めることが必要である、という意見がある。

さらに、CEF がさまざまな国や機関で実施に移されているが、学習者が学習した結果が、真に機関を超え、国を越えて実際に相互認証されているのであろうか、認証されうるのであろうか、という本質的な疑問の声が上がっている。異なる機関で学習し、B1 と認定された 2 人の言語能力が、同じであるとどのように証明できるのだろうか。「私の B1 レベルとあな

たの B1 レベルと同じだとどうわかるのか」という問いに始まり、欧州評議会の言語政策部局は、語学能力試験の CEF への関連付けに関するマニュアルのパイロット版 (Manual for Relating Language Examinations to CEF) を 2003 年 9 月に作成、ウェブ上に公開した。そのパイロット版は 146 ページにおよぶ内容のものである。ただし、同内容をまとめたマニュアルの概観 (Overview of Preliminary Pilot Version) も公開されているので、以下に簡単に紹介する (Takala 2004a も参照のこと)。現在多くの語学試験が CEF との関連を主張しているが、ほとんどのものはその根拠や検証結果を提示していない、あるいはその根拠が適当ではない、などであり、危惧される状況である。マニュアル作りの一番の関心事は、水準を保つことであり、信頼性、妥当性の高い試験の普及を推進する目的で、試験開発ではないとしている。

1.3.4.1 目的

マニュアル作成に直接かかわったのは、さまざまな分野で、CEF に長年関わっている B. North、N. Figueras、P. van Avermaet、S. Takala そして N. Verhelst 氏とである。その他に C. Alderson、J. de Jong、J. Trim 氏らもプロジェクトの一部に貢献している。マニュアル作成は、2002 年 7 月のヘルシンキにおけるセミナーが、その発端となっている。

このマニュアルは、試験開発者に試験作成にあたって基本となる方法と技術の原則を提供するものである。その目的とするところは、CEF に関連して試験を位置づける際の作成者の手助けであり、具体的には、次のことを促進する。

- ・試験作成過程の透明化のために、試験関係者を啓蒙すること
- ・試験をほかの試験と比較可能にすること
- ・試験開発に関わる国内および国を越えての機関間、関係者間のネットワーク充実に寄与すること

つまり、このマニュアルは、試験の作成マニュアルや、簡便な試験作成方法の秘訣の伝授書でもない。また、ある特定の試験の作成の仕方や、理論、方法論を供するものでもない。よって、単なる技術面でのガイドというより、行動を起こすための指針である、という立場を取っている。

1.3.4.2 関連付けの過程

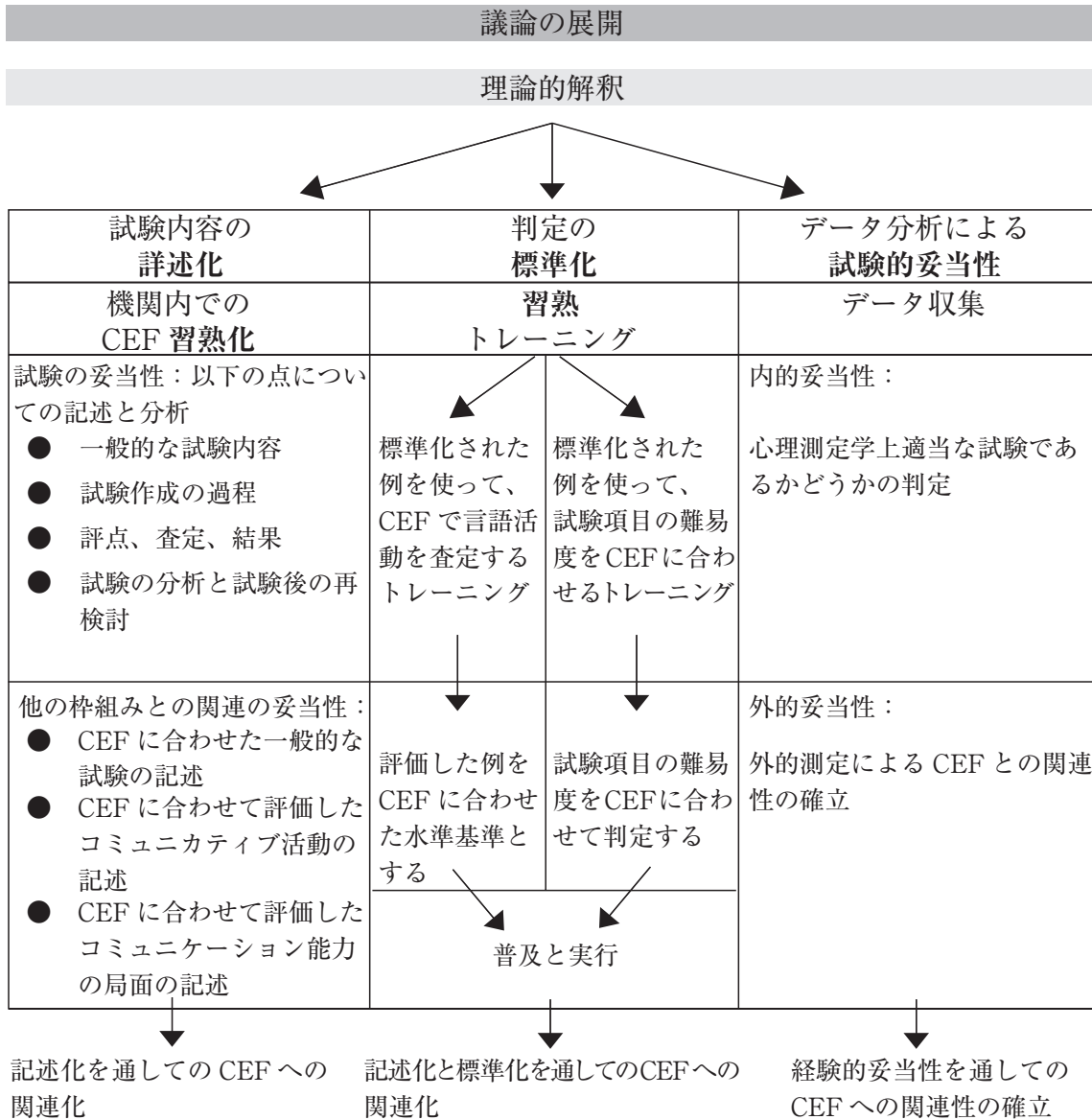
試験を一貫して、適切に CEF に関連づけしていく作業の責務は試験作成・実施関係者にある。マニュアルでは、これらのプロセスの手順を図にして示している (図 2 参照)。そこに出てくる考え方を簡単に説明する。

- ・習熟化 (Familiarisation) : 関係者が CEF の考え方、レベル、記述文などに習熟する。
- ・詳述化 (Specification) : 試験の目的、学習者のニーズなどを基に、試験の構成や内容を表す。そして、その内容を CEF の分類とレベルに関連づけて分析する。その際には、CEF が主たる参考書となるが、*The Threshold Level*、*Profile Deutsch*、*Un Référentiel* などの既に開発されたものの記述内容を参照することができる。
- ・標準化 (Standardisation) : 関係者一同が CEF レベルの意味するところを共通理解して、それを実行に移すことによって判定の標準化を図る。そのためには、まず、CEF につい

て習熟し、次に関係者が CEF レベル判定のトレーニングをし、試験内容と関係する具体例をあげ、それについて議論し、判定基準を定めていくことである。

- ・経験による妥当性 (Empirical validation) : データを収集し、分析を行うことにより、試験そのものの妥当性と CEF との関連における妥当性を図る。

図2 語学試験を CEF に関連づけていく過程の図式



(Relating Language Examinations to CEF Manual Overview より筆者訳)⁴

また、欧州評議会の言語政策部局は、マニュアルを使用して、CEF を既存の語学試験に関連づけようとしている関係者からのフィードバック、ケーススタディのデータ収集にも積極的であり、マニュアルの利用者に対しての評価表なども提供している。マニュアルに沿っ

⁴ Council of Europe (2003) Relating Language Examinations to the Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment (CEF) Manual Overview of Preliminary Pilot Version
http://www.coe.int/T/E/Cultural_Co-operation/education/Languages/

て、標準化し、検証し、その結果を報告することによって、試験を CEF に関連付けることができる。現在、フィンランドでは前項試験を CEF に関連づけるプロジェクトが行われおり、ドイツのゲーテ・インスティテュートは口頭表現を CEF と関連付けし基準化するプロジェクトを行っているなどの報告がある。2007 年には、試行が終わり完成されたマニュアルが出される予定である。マニュアルが完成し、その結果としては、CEF 認定されたヨーロッパ内の語学試験を、一覧表で表すことができる。そして、それぞれの試験成績によって、CEF 参照レベルとの対照ができるようになる。

1.3.5 CEF の今後

EU の政策にも位置づけされた CEF は、ヨーロッパでの言語教育に共通の枠組み、共通の記述レベルを提供し、ヨーロッパ内での言語教育関係者に共通の指標を与えた。ヨーロッパ内で言語能力をお互に通じる用語で語られるようになったことは、価値あることだ。

今後さらに、どのような形で、どのくらいの汎用性を持って、CEF がヨーロッパ内に浸透していくか、また国際的にどのように受け入れられていくか、見ていく必要がある。CEF 開発者の間では、自己満足に陥ることなく、さらに次々と改良策、応用策のプロジェクトが生み出されていくことは、確かであるので、目が離せない。

参考文献

Alderson, J. C. (Ed.) (2002). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment: Case Studies*. Strasbourg, Council of Europe.

Alderson, J. C., Figueras, N., Kuijper, H., Nold, G., Talaka, S., & Tardieu, C. (2004a). *The Dutch CEF Construct Project*. Presentation at EALTA Conference, Kranjska Gora, Slovenia, May 14-16, 2004.

----- (2004b). The development of specifications for item development and classification within the Common European Framework of Reference for Language: Language, teaching, assessment. Final Report of the Dutch CEF Construct Project.

Bailly, S., Devitt, S., Gremmo, M. J., Heyworth, F., Hopkins, A., Jones, B., Makosch, M., Riley, P., Toks, G., Trim, J (Eds.). (2002). *Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment A Guide for Users*. Strasbourg, Council of Europe.

Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.

Council of Europe (2002). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment Case Studies*. Strasbourg, Council of Europe.

de Jong, J. H.A.L. (2004). *The role of the Common European Framework*. Presentation at

EALTA Conference, Kranjska Gora, Slovenia, May 14-16, 2004.

Takala, S. (2004a). *Manual for Relating Examinations to the common European Framework*. Presentation at EALTA Conference, Kranjska Gora, Slovenia, May 14-16, 2004.

----- (2004b). *Development of foreign language proficiency in Finland: some facts and explanations*. Presentation at the National Language Conference, Adelphi, Maryland, the U.S.A, June 22-24, 2004.

http://66.102.9.104/search?q=cache:sQ80XvmPDCQJ:www.nlconference.org/docs/Takala_paper.doc+Sauli+Takala&hl=ja (2004年12月5日現在)

van Ek, J.A. & Trim, J.L.M. (1991) *Threshold 1990*. Cambridge, Cambridge University Press.

van Ek, J.A. & Trim, J.L.M. (1991) *Waystage 1990*. Cambridge, Cambridge University Press.

van Ek, J.A. & Trim, J.L.M. (2001) *Vantage*. Cambridge, Cambridge University Press.

藤原美枝子 (2003) 「ヨーロッパにおける言語運用能力評価の共通フレームワークーコミュニケーション能力の新しい理解をめぐってー」、『言語と文化』第7号、甲南大学国際言語文化センター、pp101 - 124.

吉島茂、大橋理枝 (訳・編) (2004) 『外国語教育Ⅱ－外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 朝日出版社 (<http://www.dokkyo.net/~daf-kurs/library.html>)

参考サイト

ヨーロッパ評議会の CEF に関するサイト

http://culture2.coe.int/portfolio/documents_intro/common_framework.html (2004年12月5日現在)

ヨーロッパ評議会による Relating Language Examinations to the Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment (CEF) のマニュアル、および概要がダウンロードできる

http://www.coe.int/T/E/Cultural_Co-operation/education/Languages/Language_Policy/
(2004年12月5日現在)

de Jong、Takala 氏とオランダ CEF 構造プロジェクトチームの EALTA Conference における発表内容について

<http://www.ealta.eu.org/conference/2004/programme.htm> (2004年12月5日現在)

オランダ CEF 構築プロジェクトの試験項目チェック枠 (The Dutch CEF Grid) のサイト

<http://www.ealta.eu.org/dutch/grid.htm> (2004年12月5日現在)

European Commission 2003 Summary of the First report on the activities of the working group on languages (EXP.LG/17/2003)

http://europa.eu.int/comm/education/policies/2010/doc/langsynthesis_en/pdf (2004 年 12 月 5 日現在)

European Commission, Implementation of “Education and Training 2010” Work Programme, Progress Report Nov 2003

http://europa.eu.int/comm/education/policies/2010/doc/language-learning_en.pdf

1.3 表2 言語使用の外的コンテキスト：能力記述文のカテゴリー

領域	場 所	機 構	関係者
私 的 領 域	家庭：家、部屋、庭 本人の 家族の 友人の ホステル、ホテルの一室 田舎、海辺	家族 社会的ネットワ ーク	両親（祖父母）、子孫、兄弟、おば、 おじ、いとこ、義理の両親、配偶者 親友、友人、知人
公 的 領 域	公的な場所： 道、広場、公園 公共交通機関 小売店、スーパーマーケット 病院、診察所、医院 運動場、競技場、公会堂 劇場、映画館、舞台 レストラン、パブ、ホテル 礼拝所	行政当局 立法 司法 厚生 奉仕団体 協会 政党 宗派	公的機関のメンバー 公務員 店員 警官、軍人、警備 運転手、車掌 通行人 選手、ファン、観客 演劇役者、観衆 ウェイター、バーテンダー 受付係 聖職者、会衆
職 業 領 域	事務所 工場 作業所 港湾、鉄道 農場 空港 小売店、店舗 サービス産業 ホテル 行政機関	会社 多国籍企業 国有会社 労働組合	雇用者／被雇用者 支配人 同僚 部下 職場友達 顧客 受付係、秘書 清掃人
教 育 領 域	学校：講堂、教室、運動場、競 技場、廊下 単科大学、総合大学 講義室、セミナー室、学生会館 宿舎、実験室、食堂	学校 単科大学 総合大学 学者集団 専門家 教育機関 成人教育機関	教室の先生 教育スタッフ 管理人 助手 親 級友 教授、講師 同僚の学生 図書館や実験室のスタッフ 食堂のスタッフ、清掃人 運搬人、秘書

事 物	イベント	行 為	テキスト
備え付け家具や通常家具 衣服 家電製品 玩具、道具、個人用の衛生用品 骨董品、書籍 野生動物、家禽、ペット 木、植物、芝生、池 家事の道具 ハンドバッグ レジャー／スポーツ用品	家族行事 出会い 偶発的な出来事、事故 自然現象 パーティー、訪問 散歩、サイクリング ドライブ 休日、遠足 スポーツ	日課 着衣、脱衣 調理、食事 洗濯 日曜大工、 ガーデニング 読書、ラジオ、テレビ 娯楽 趣味 ゲームとスポーツ	電報 保証書 レシピ 業務マニュアル 小説、雑誌 新聞 ちらし パンフレット 個人の手紙 放送・話し (の録音)
お金、財布、小銭入れ 用紙 品物 武器 リュックサック ケース、取っ手、ボール プログラム 食事、飲み物、スナック菓子 パスポート、免許	偶発的な出来事 事故、病気 公的な会合 民事訴訟、裁判 仮装行列、罰金、逮捕 試合、コンテスト 上演 結婚、葬儀	有料、無料の 公共サービス 医療サービスの利用 車／鉄道／船／ 飛行機での旅 公的な娯楽と レジャー活動 宗教的礼拝	公的発表と掲示 ラベルと包装 小冊子、落書き チケット、時刻表 掲示、規則 プログラム 契約 メニュー 聖典、説教、賛美歌
事務用機器 産業機器 産業用工作道具	会合 面接 宴会 会議 見本市 協議会 季節大売り出し 労働災害 労働争議	仕事の経営 事業運営 生産活動 事務手続き トラック運送 販売業務 販売、市場調査 コンピュータ操作 会社の維持	仕事の手紙 報告と覚書 生命・安全の警告 業務マニュアル 規則 宣伝材料 ラベルと包装 業務の説明 方向指示 名刺
筆記具 学校の制服 道具と服装 食べ物 AV 機器 黒板とチョーク コンピュータ 書類かばんや通学かばん	入学、学期始め 別れ 訪問と交換 参観日／参観のタベ 運動会、試合日 素行上の問題	朝礼 授業 試合 遊び時間 クラブ活動と 社会活動 講義、作文課題 実験室での実験 図書館での作業 セミナーと個人指導 宿題 ディベートと議論	(上記の) 加工して いないテキスト 教科書、読み物 参考図書 板書の文章 OHP コンピュータ画面の上の テキスト ビデオスクリプト 練習問題 雑誌記事 抄録 辞書

吉島・大橋 (訳・編) 2004 : pp48-49 より
©Goethe-Institut Tokyo

1.3 表3 共通参照レベル：自己評価表

		A1	A2	B1
理解すること	聞くこと	はっきりとゆっくりと話してもらえれば、自分、家族、すぐ周りの具体的なものに関する聞き慣れた語やごく基本的な表現を聞き取れる。	(ごく基本的な個人や家族の情報、買い物、近所、仕事などの) 直接自分につながるのある領域で最も頻繁に使われる語彙や表現を理解することができる。短い、はっきりとした簡単なメッセージやアナウンスの要点を聞き取れる。	仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、明瞭で標準的な話し方の会話なら要点を理解することができる。話し方が比較的ゆっくり、はっきりとしているなら、時事問題や、個人的もしくは仕事上の話題についても、ラジオやテレビ番組の要点を理解することができる。
	読むこと	例えば、掲示やポスター、カタログの中のよく知っている名前、単語、単純な文を理解できる。	ごく短い簡単なテキストなら理解できる。広告や内容紹介のパンフレット、メニュー、予定表のようなものの中から日常の単純な具体的に予測がつく情報を取り出せる。簡単に短い個人的な手紙は理解できる。	非常によく使われる日常言語や、自分の仕事関連の言葉で書かれたテキストなら理解できる。起こったこと、感情、希望が表現されている私信を理解できる。
話すこと	やり取り	相手がゆっくり話し、繰り返し返したり、言い換えたりしてくれて、また自分が言いたいことを表現するのに助け船を出してくれるなら、簡単なやり取りをすることができる。直接必要なことやごく身近な話題についての簡単な質問なら、聞いたり答えたりできる。	単純な日常の仕事の中で、情報の直接のやり取りが必要ならば、身近な話題や活動について話し合いができる。通常は会話を続けていくだけの理解力はないのだが、短い社交的なやり取りをすることはできる。	当該言語圏の旅行中に最も起こりやすいたいていの状況に対処することができる。例えば、家族や趣味、仕事、旅行、最近の出来事など、日常生活に直接関係のあることや個人的な関心事について、準備なしで会話に入ることができる。
	表現	どこに住んでいるか、また、知っている人たちについて、簡単な語句や文を使って表現できる。	家族、周囲の人々、居住条件、学歴、職歴を簡単な言葉で一連の語句や文を使って説明できる。	簡単な方法で語句をつないで、自分の経験や出来事、夢や希望、野心を語るることができる。意見や計画に対する理由や説明を簡潔に示すことができる。物語を語ったり、本や映画のあらすじを話し、またそれに対する感想・考えを表現できる。
書くこと	書くこと	新年の挨拶など短い簡単な葉書を書くことができる。例えばホテルの宿帳に名前、国籍や住所といった個人のデータを書き込むことができる。	直接必要のある領域での事柄なら簡単に短いメモやメッセージを書くことができる。短い個人的な手紙なら書くことができる：例えば礼状など。	身近で個人的に関心のある話題について、つながりのあるテキストを書くことができる。私信で経験や印象を書くことができる。

B2	C1	C2
<p>長い会話や講義を理解することができる。また、もし話題がある程度身近な範囲であれば、議論の流れが複雑であっても理解できる。 たいていのテレビのニュースや時事問題の番組も分かる。標準語の映画なら大多数は理解できる。</p>	<p>たとえ構成がはっきりしなくて、関係性が暗示されているにすぎず、明示的でない場合でも、長い話が理解できる。特別の努力なしにテレビ番組や映画を理解できる。</p>	<p>生であれ、放送されたものであれ、母語話者の速いスピードで話されても、その話し方の癖に慣れる時間の余裕があれば、どんな種類の話し言葉も難無く理解できる。</p>
<p>筆者の姿勢や視点が出ている現代の問題についての記事や報告が読める。 現代文学の散文は読める。</p>	<p>長い複雑な事実に基づくテキストや文学テキストを、文体の違いを認識しながら理解できる。 自分の関連外分野での専門的文章も長い技術的説明書も理解できる。</p>	<p>抽象的で、構造的にも言語的にも複雑な、例えばマニュアルや専門的文章、文学作品のテキストなど、事実上あらゆる形式で書かれた言葉を容易に読むことができる。</p>
<p>流暢に自然に会話をする事ができ、母語話者と普通にやり取りができる。 身近なコンテキストの議論に積極的に参加し、自分の意見を説明し、弁明できる。</p>	<p>言葉をことさら探さずに流暢に自然に自己表現ができる。社会上、仕事上の目的に合った言葉遣いが、意のままに効果的にできる。 自分の考えや意見を精確に表現でき、自分の発言を上手に他の話し手の発言にあわせることができる。</p>	<p>慣用表現、口語体表現をよく知っていて、いかなる会話や議論でも努力しないで加わることができる。 自分を流暢に表現し、詳細に細かい意味のニュアンスを伝えることができる。 表現上の困難に出会っても、周りの人がそれにほとんど気がつかないほどに修正し、うまく繕うことができる。</p>
<p>自分の興味関心のある分野に関連する限り、幅広い話題について、明瞭で詳細な説明をすることができる。 時事問題について、いろいろな可能性の長所、短所を示して自己の見方を説明できる。</p>	<p>複雑な話題を、派生的問題にも立ち入って、詳しく論ずることができる。一定の観点を展開しながら、適切な結論でまとめ上げることができる。</p>	<p>状況にあった文体で、はっきりとすらすらと流暢に記述や論述ができる。効果的な論理構成によって聞き手に重要点を把握させ、記憶にとどめさせることができる。</p>
<p>興味関心のある分野内なら、幅広くいろいろな話題について、明瞭で詳細な説明文を書くことができる。 エッセイやレポートで情報を伝え、一定の視点に対する支持や反対の理由を書くことができる。 手紙の中で、事件や体験について自分にとっての意義を中心に書くことができる。</p>	<p>適当な長さでいくつかの視点を示して、明瞭な構成で自己表現ができる。 自分が重要だと思う点を強調しながら、手紙やエッセイ、レポートで複雑な主題を扱うことができる。読者を念頭に置いて適切な文体を選択できる。</p>	<p>明瞭な、流暢な文章を適切な文体で書くことができる。 効果的な論理構造で事情を説明し、その重要点を読み手に気づかせ、記憶にとどめさせるように、複雑な内容の手紙、レポート、記事を書くことができる。 仕事や文学作品の概要や評を書くことができる。</p>